

2021年5月23日 ペンテコステ礼拝

大井バプテスト教会

説教題「語らないではいけない」使徒言行録4章13～31節

主任牧師 加藤 誠

「わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを語らないではいけない」(使徒 4:20 口語訳)。

ペンテコステは、あのか弱かった弟子たちに聖霊が注がれて、イエス・キリストの証人として、世界に向けて力強くさまざまな言葉で福音を語りだした日です。

聖霊(神さまの息吹)は、今日も「主イエスと共に出かけてください!」と、私たちが世界に向けて遣わされます。なぜなら今日も世界中の人びとが、また被造物が、神さまの真実の愛と正しさ、慰めと励ましを必要としているからです。

私たちが住む世界には「神さま、ほんとうにこんなことがゆるさされているのですか?!」という不正義や嘘、誤魔化しがまかり通り、そのために心や体を深く傷つけられた人々の悲しみと怒りの涙であふれています。いわゆる貧しい国だけではありません。豊かな国と言われている中で、人と人との結びつきが断ち切れ、子どもも大人も生きる意味を見失い、愛を失い、傷つけ合っています。

その現実が一番深く痛み、悲しんでおられるのは神さまです。神さまは、何とかしてすべての人を御自分の愛のもとに連れ戻し、その傷を癒し、悲しみを慰めて、明日に向かう希望に生きてほしいと熱く祈り願い、独り子を送られました。

独り子である主イエスは十字架で死なれました。いや正確に言うと私たちの弱さ、ずるさ、「神などいない」という傲慢によって殺されました。しかし神は主イエスをよみがえらせ永遠の命に生かされました。主イエスは今も生きておられる。主イエスの愛と義によってこそ私たちは赦され、神様のもとに連れ戻され救われる。これが今日も私たち一人ひとりに向けて語られている聖書の愛のメッセージです。

「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3・16)。

この神さまの愛を隣人と分かち合い、世界中に届けていく。そのために聖霊は今日も私たちが世界に向けて派遣するのです。

今年のペンテコステの多言語聖書朗読では、大井教会員による朗読の他に、日本バプテスト連盟から世界に派遣されている働き人にヨハネ3・16を読んでいただきました。またアメリカから遣わされてきたフーシー先生ご夫妻、ミャンマーから日本に来て鹿児島教会で仕えておられるマウマウタン先生ご夫妻にも参加していただきました。こんなふうにオンラインで世界とつながることができるのは、この一年で学んだ大きな可能性です。今日も神さまに遣わされたそれぞれの場所で懸命に福音を伝えておられる先生方に心寄せて、祈りを合わせたいのです。

中でも今日は、エイエイミンさんとマウマウタン先生ご夫妻の働きを覚えたいと思います。1991年に日本語を学ぶために来日されたマウマウタン先生は、東京の仙川教会で献身の思いが与えられて西南の神学部で学び、2002年から鹿児島霧

島市の国分教会で牧師として仕えておられます。わたしは最初、ミャンマー人の先生が霧島という地方の町で牧師をされるのは大変なのではないかと勝手に想像していたのですが、今から十数年前に国分教会をお訪ねした時に、マウマウタン先生ご夫妻がその誠実な人柄のゆえに地域の方々から愛され、篤い信頼を寄せられている姿に深く感銘を受けました。聖書の愛、イエス・キリストの愛は、国や人種や言葉を超えるのです。ただ、その先生たちの母国ミャンマーは今、悲痛な沈黙に覆われています。国軍のクーデターの後、人びとは教会に集うことを禁じられ、最初は可能だった ZOOM での礼拝も今は危険になり、ひっそりと家にもっているとのこと。牧師たちの中には国軍に拘束された人も出ていて、バプテスト連盟の指導者たちも命の危険を感じて身を隠していると聞きました。ミャンマーは大部分が仏教徒の国ですが、国の周辺部に住んでいる少数民族にはクリスチャンが多いこともあり、少数民族のクリスチャンは民族差別と宗教差別の二重差別に苦しめられて来ました。十字架は焼かれる、妨害目的の停電は日常のこと、就職でも露骨な差別を受けてきたそうです。それが民主化によって民族間の和解が少しずつ進み、就職の機会も広がってきた矢先に、また軍隊による思想統制の支配に戻ってしまったのです。深い失望の中で、身の危険を賭してでも国軍の命令には従えないと、人びとは非暴力で不服従運動を続けています。国軍は「海外にあってミャンマーの不服従抵抗運動を支援する者は許さない！」と言っていますので、マウマウタン先生も黙っている方が良いでしょうが、「ミャンマーで覚悟を決めて闘っている人々に連帯して、私たちも覚悟を決めて聖書が示している語るべきことを語っていきます」と言われていました。

初代教会のペトロたちは主イエスを十字架で処刑した権力者たちから「語るな！」と繰り返し脅されますが、「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」（使徒 4・20）と言って、力強く神への信仰に立ち、行動していきました。それはペトロたちがもっている強さのゆえではなく、ただ聖霊によって与えられる不思議な力のゆえでした。そしてその聖霊の力を受けて立ち上がる教会を支えたのが祈りだったのです。権力者たちによって逮捕され尋問を受けるペトロとヨハネは決して孤独ではありませんでした。教会の仲間たちが祈り続けていたからです。教会の仲間たちのもとに戻った二人は、「主よ、今こそ、彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語るようにしてください」と、さらに仲間たちと祈りを合わせました。すると「一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした」のでした（4・31）。

私たちは、今年のペンテコステに何を聖書から聴き、語るのでしょうか。わたしの願いが叶うよう祈る前に、「神さまの御心がなりますように」との祈りで一つとされたいのです。そして主イエスと共にここから出かけていしましょう。